

おぼけな庫5

よいさ よいさ

山田野理夫・作 大海 赫・絵



913.6	やま	だ の り お
	山	田 野 理 夫 作 よいさ よいさ おばけ文庫⑤ 太 平 出 版 社 1976 P158 22cm

山田野理夫 やまのりお 1922年仙台に生まれる。作家・歴史家。日本文芸家協会・日本ペンクラブ会員。第六回農民文学賞受賞。おもな著書に『天にかえったジュリア』(太平出版社刊)、『おばけの民話』『伊達政宗』『花と愛の民話』などの児童書のほか、『キリシタン研究』『キリシタン文学』などの編著が多数ある。

大海 赫 おおうみ あかし 1931年東京に生まれる。1960年早稲田大学大学院修了、フランス哲学専攻。自作の童話は、さし絵もすべて自分で担当している。おもな著書に『クロイヌ家具店』『ビビを見た!』『ドコカの国にようこそ!』などがある。

よいさ よいさ

おばけ文庫⑤

母と子の図書室 34-26

1976年6月15日 第1刷発行

1,300

著 者 山 田 野 理 夫

発 行 者 崔 容 徳

発行所 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル

株式会社 太 平 出 版 社 ©

TEL 291-9744・9752, 294-7083 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

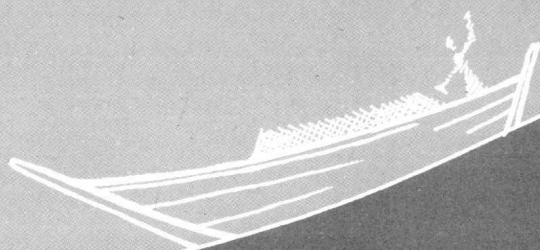
おぼけな庫ち

よいさ よいさ

山田野理夫・作 大海 赫・絵



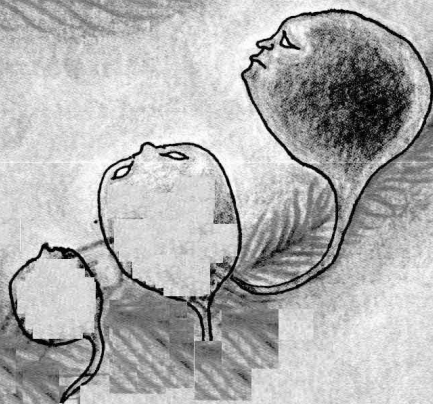
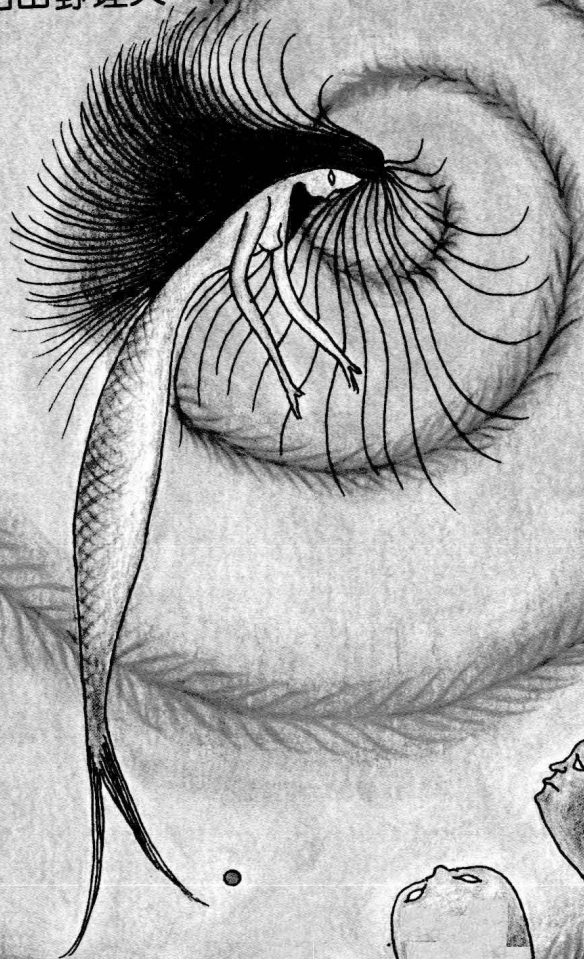




おばけ文庫 5

よいさ よいさ

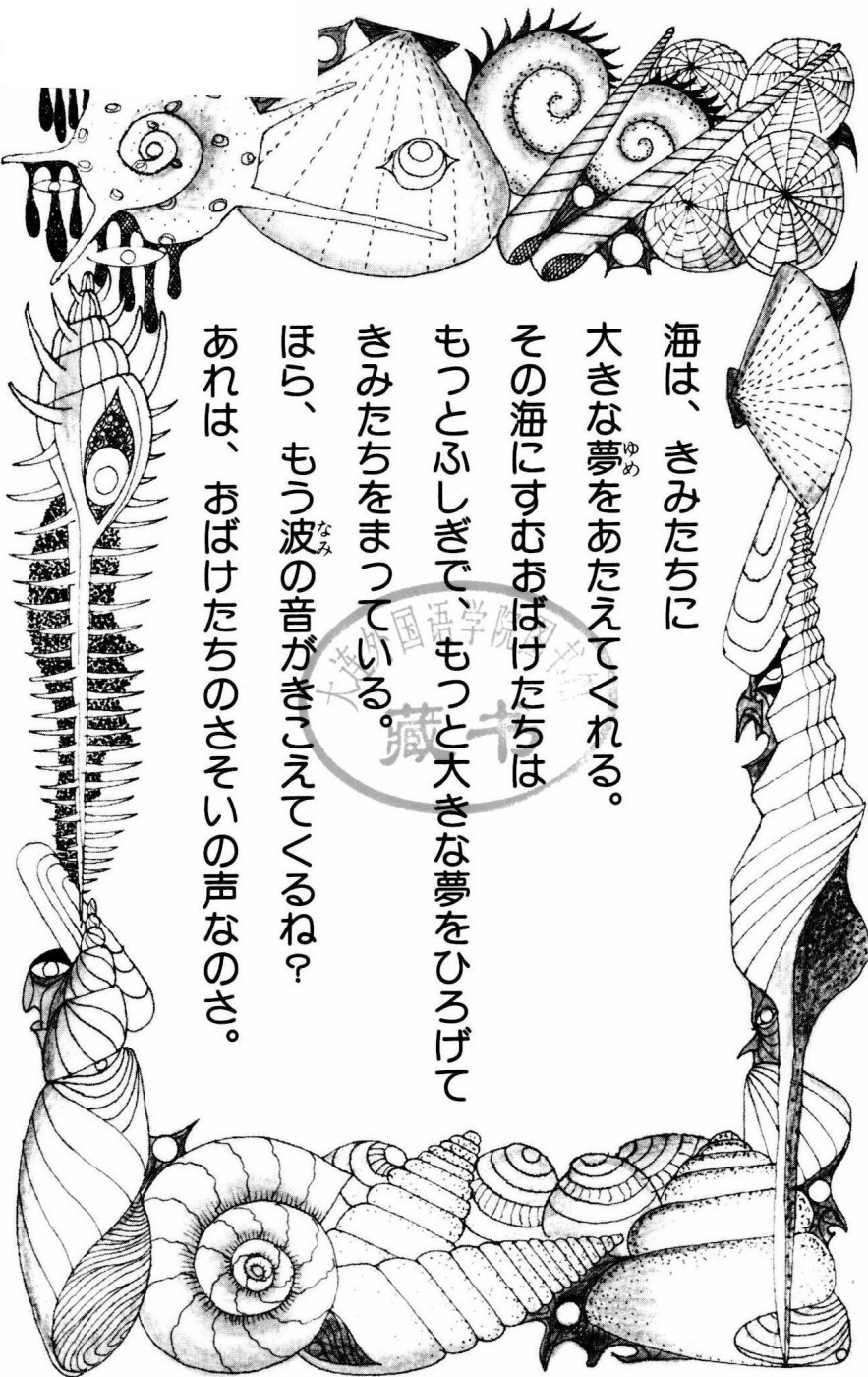
山田野理夫・作 天海 赫・絵



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



海は、きみたちに

大きな夢^{ゆめ}をあたえてくれる。

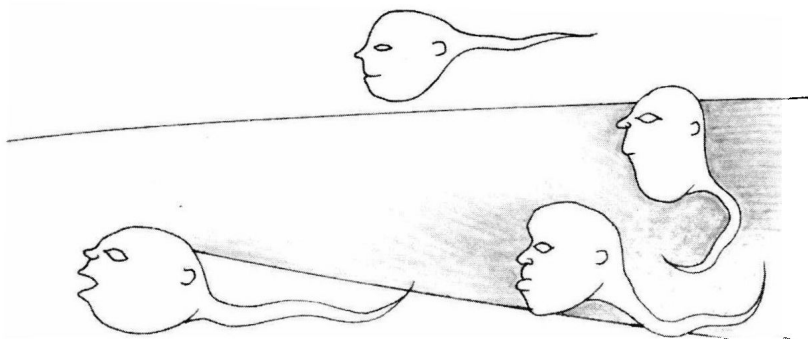
その海にすむおばけたちは

もつとふしぎで、もつと大きな夢をひろげて

きみたちをまっている。

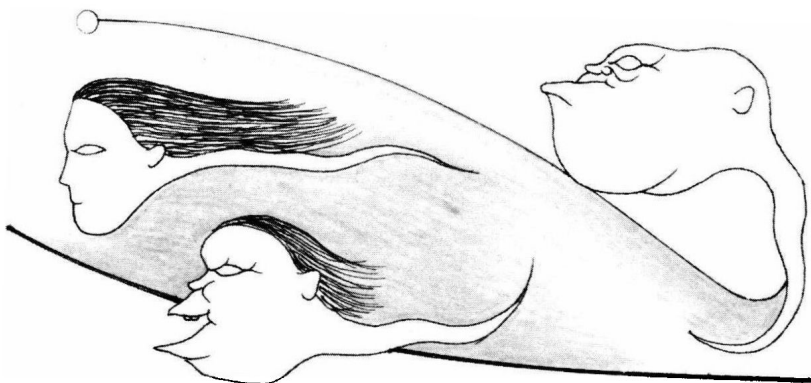
ほら、もう波^{なみ}の音がきこえてくるね？

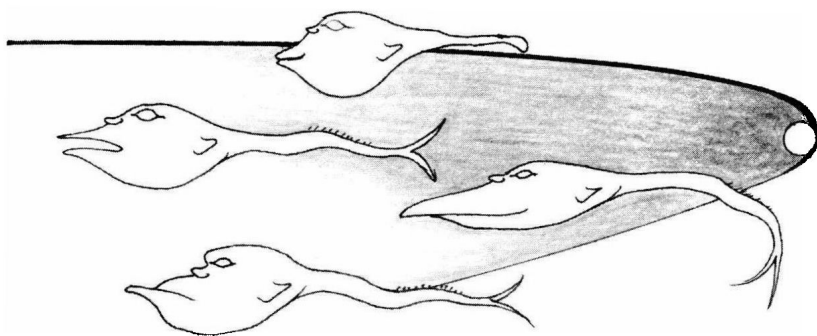
あれは、おばけたちのさそいの声なのさ。



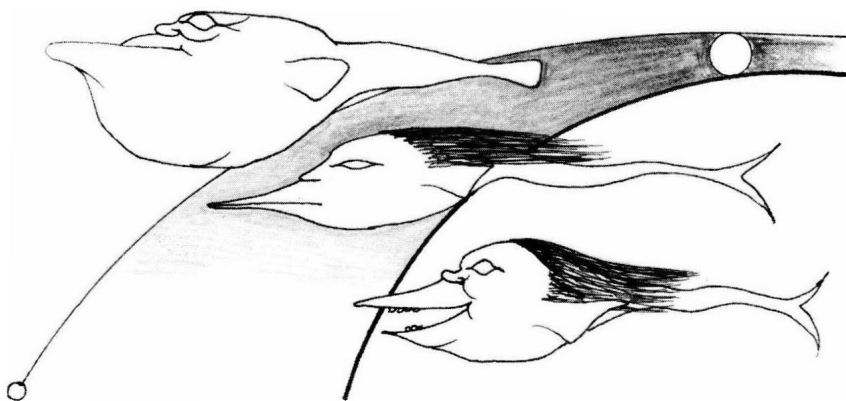
おばけ文庫⑤ よいさよいさ もくじ

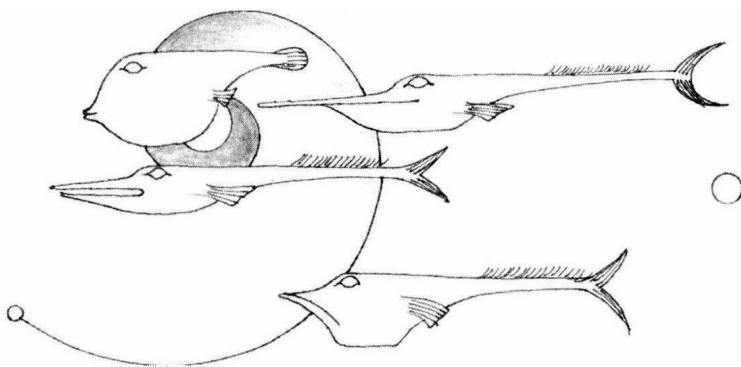
二百十七番めのはなし	しろ	女 おんな	12
二百十八番めのはなし	まいく	び	16
二百十九番めのはなし	人魚 にんぎょ の死 し	骸 がは	17
二百二十番めのはなし	アカ	エイ	24
二百二十一番めのはなし	こくう	ダイコ	25
二百二十二番めのはなし	イシナゲ	ゲンジョ	27
二百二十三番めのはなし	棺 ひつぎ	船 ふね	29
二百二十四番めのはなし	ぬれめ	くら	30
二百二十五番めのはなし	いそ	がき	39
二百二十六番めのはなし	いそ	てんぐ	40
二百二十七番めのはなし	うき	もの	41
二百二十八番めのはなし	ウシ	おに	43
二百二十九番めのはなし	海 うみ	小僧 こぞう	44
二百三十番めのはなし	影 かげ	ワ	47



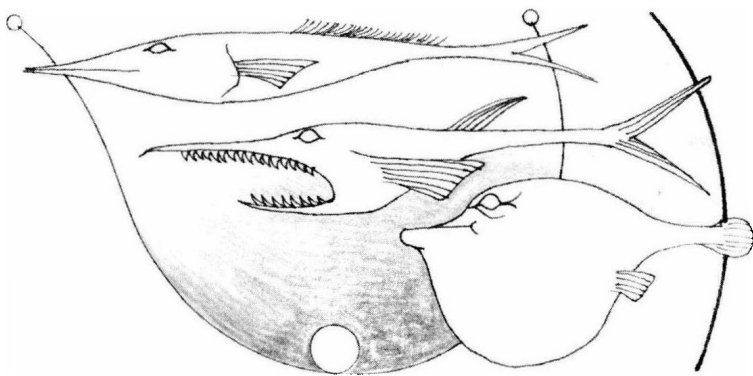


二百三十一番めのはなし	コロモダコ	51
二百三十二番めのはなし	ニイギヨ	53
二百三十三番めのはなし	船 ^{ふね} ゆうれい	54
二百三十四番めのはなし	フナシトギ	56
二百三十五番めのはなし	ともかずき	58
二百三十六番めのはなし	しき ⁶⁰	
二百三十七番めのはなし	いそおなご	61
二百三十八番めのはなし	ぬれおんな	63
二百三十九番めのはなし	海 ^{うみ} 坊 ^ぼ 主 ^ず	65
二百四十番めのはなし	サザエおに ⁷¹	
二百四十一番めのはなし	壇 ^{だん} ノ浦 ^{うら} の妖 ^ま 怪 ^{かい}	72
二百四十二番めのはなし	魚 ^{いさな} 女 ^{によう} 房 ^{ぼう}	78
二百四十三番めのはなし	ワニザメ	86
二百四十四番めのはなし	ガイコツ	92
二百四十五番めのはなし	海 ^{うみ} グモ	96
二百四十六番めのはなし	よいさよいさ	98



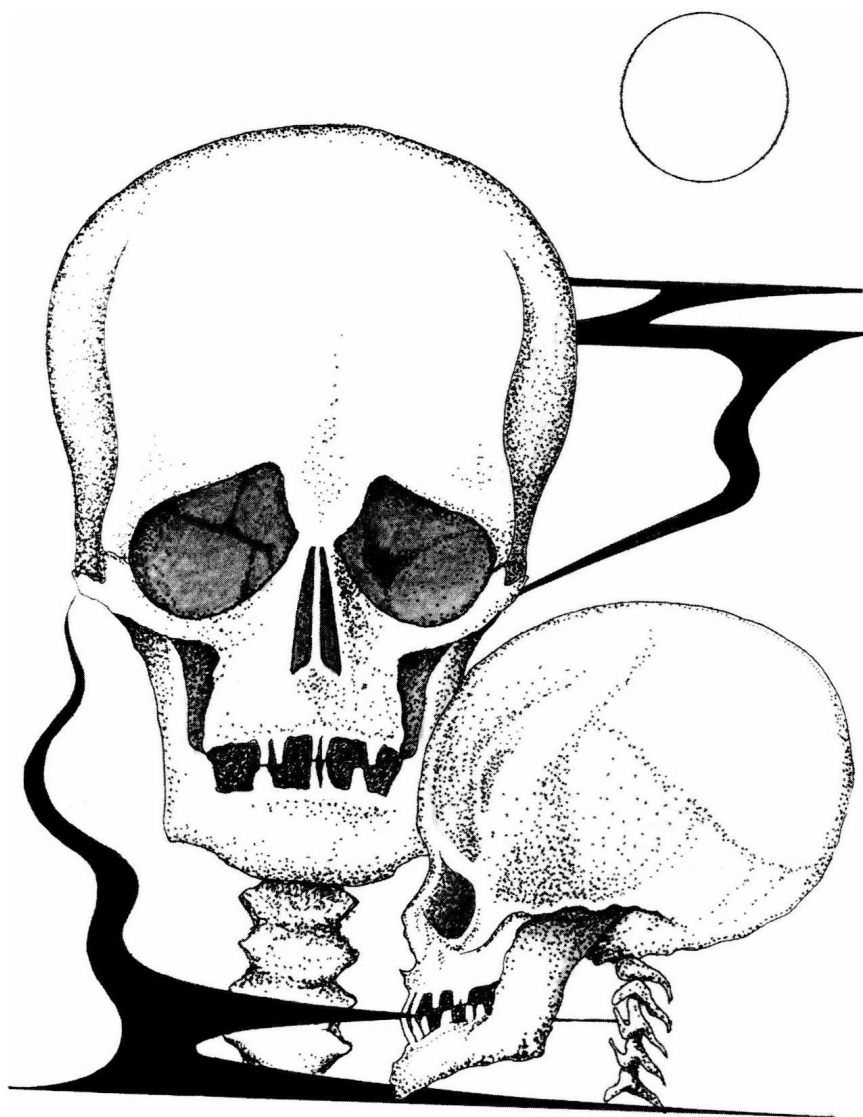


二百四十七番めのはなし	ツイヤショージョー	101
二百四十八番めのはなし	海のほとけさま	101
二百四十九番めのはなし	へビダコ	107
二百五十番めのはなし	くもふり	111
二百五十一番めのはなし	海ろくろつくび	117
二百五十二番めのはなし	かみきりあま	120
二百五十三番めのはなし	アワビ妖怪	122
二百五十四番めのはなし	海ネズミ	124
二百五十五番めのはなし	海ガメ	126
二百五十六番めのはなし	人魚	128
二百五十七番めのはなし	海女	132
二百五十八番めのはなし	怪魚	134
二百五十九番めのはなし	マブイ	136
	あとがき	153



よいさ よいさ

山田野理夫・作 大海 赫・絵



太平出版社 母と子の図書室

おばけ文庫 5

二百十七番めのはなし　しろ　女おんな

四国沖しこくおきではなしである。

漁師りょうしの父とむすこが沖へ漁にでた。春がきたといっても、まださむかった。

「さむいなあ。沖で漁をするのは、すこしはやすぎたようだ。」

「それでも、たくさんとれましたね。」

「おまえの、舟ふねをこぐうでがあがったからさ。」

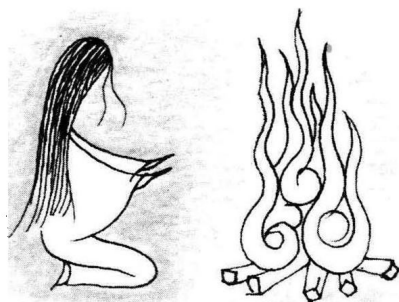
「父ちゃん、それがどうしても、浜はまのほうにすすまないんだよ。」

「風がつよいからかな？」

「日がおちてきたよ。」

「どこか、島しまかげをさがして、朝までまつのだ。あせってはならない。」

「はい。」



父とむすこは、舟をながれにまかせた。

ひとつの島にながれついた。

「木ぎれをひろってたき火をしよう。」

メラメラと火がもえはじめた。このあたりは、そうなんする舟がおおいので、こわれた舟の木がたくさんある。

父とむすこは、ウトウトしてきた。

ふと、ふたりは人のけはいで目がさめた。

いつのまにきたのか、わかい女がたき火に手をあぶっているのだ。

その女は、このさむさというのに、一枚の白い着物きものを着ているだけだ。

父は、きみがわるくなった。

「おまえさんは、どこからきたのだい？」

声をかけても、わかい女はさびしくわらっていて、へんじをしない。

「おなかでもすいているようだね。そうそう、きょうは漁がおおかつたので、ごちそうしよう。おまえ、舟から魚さかなをもってきてくれ。」

父は、むすこにいった。

むすこは舟にもどった。そのとき、父が目くばせしたことを知り、ともづなをひいた。

父は、

「もっと火をたこう、魚がはやくやけるよう。せがれはおそいなあ。」
といい、木ぎれをくべた。

「それにしてもおそい。おまえさん、火をたやさないように、みていてください。みてきますから。」

父は、「しょうがないやつだ」などといいながら、いそいで舟のそばにきた。そして、舟にとびのり、

「それ！」

とこぎだした。舟は、たちまち島をはなれた。

わかい女は、

「父子おやこものろまだよ。ちよっと、みてくるか。」
といって立ちあがった。

舟の走っていくのがみえた。

「ちくしょう。気がついてにげたな。」

女は齒^はぎしりした。あたまの髪^{かみ}の毛^け一本をぬき、口で、

「ふう。」

とふいた。髪の毛は風をきって、はるか舟にとび、舟をつなぎとめた。

「舟があともどりするぞ。」

「父ちゃん、髪の毛をきってくれ。」

わかい女は、つぎからつぎへと髪の毛をふきつけてくるが、舟足^{ふなあし}ははやく、もうとどかなくなった。

「ああ、これでたすかったぞ。」

ハアハア、かたでいきをした。

「あれ、舟の中の魚が一ぴきもなくなっているぞ。」

としよりのはなしでは、この女はしろ女^{おんな}といって、人を海の底^{そこ}にひきずりこむ妖怪^{ようかい}だそうだ。